

難後拾遺注釈（一）

著者	鳥井 千佳子
引用	百舌鳥国文. 2021, 30, P.257-275
URL	http://doi.org/10.24729/00017439

難後拾遺注釈（一）

凡例

- 1、本稿は、冷泉家時雨亭文庫蔵本『難後拾遺』を底本とした。底本の本文を改める必要があると考えた箇所については、「竜氏旧蔵契沖本」「神宮文庫本」（ともに関根慶子『難後拾遺集成』風間書房昭50所収）によって校訂を加えた。
- 一、読みやすさを優先して、以下の方針で本文を校訂した。
- 1 底本は片仮名で表記されているが、これを平仮名に改めた。本文には濁点と句読点を施した。会話文や引用された歌句には「」を付した。
- 2 本文には適宜漢字をあて、仮名遣いは歴史的仮名遣いに統一した。漢字は通行の字体を用いた。助詞・助動詞は平仮名にした。活用語には適宜活用語尾を補った。底本を校訂した場合は、該当する語句の右に底本の本文を傍記し、補った語句には傍点を付した。

鳥井千佳子

一、注は、「主な校異」「現代語訳」「引用歌」「後拾遺集」「語釈」「補説」の項目に分けた。

〔主な校異〕底本の冷泉家時雨亭文庫蔵本（冷）（一）内は略称、以下同じと、「竜氏旧蔵契沖本」（契）「神宮文庫本」（神）の語句の異同を記した。上記の二本にない異同のみ、清水浜臣校本（浜）で補った。底本以外の、「竜氏旧蔵契沖本」「神宮文庫本」のみに見られるあきらかな誤記は省略した。丸数字は行数である。

〔引用歌〕には、『難後拾遺』の注の中で、歌全体または一部が引用されている歌を出典とともに記した。

〔後拾遺集〕には、取り上げられた後拾遺集歌の主な本文異同、詞書と作者、語句の注釈などを記した。

対校に使用した後拾遺集の伝本は次のとおりである。『難後拾遺』の本文（難冷・契・神）と次の四本の和歌本文に異同がある場合のみ、○本文の項に記した。

・冷泉家本（冷）：冷泉家時雨亭叢書『後拾遺和歌集』（朝日新聞社）

・陽明文庫伝為家本（陽為）：陽明叢書『後拾遺和歌集』

（思文閣）

・陽明文庫乙八代集本（陽乙）：同右

・太山寺本（太）：『太山寺本後拾遺和歌集とその研究』

藤本一恵（桜楓社）

○詞書・作者の項には、右記の冷泉家本の本文を引用した。

【語釈】は、『難後拾遺』の注の中の語句を対象とし、各項目の記述にさらに説明が必要な場合は【補説】に記した。

〔序〕

「後拾遺としてこのころ世に書きさわぐ集あり」とて人のなすを、いとまのひまに読ませて聞きたまへれば、いとをかしうおぼゆる歌もあり、いかげあらんとおぼゆるもあれば、これを書きいだして、「それはさぞ」と言ふ人あらば、げにも思はむとてなり。このなかにやむことなき歌よみのよめると書きつけられたる歌の、こころえがたきもあれば、それをもおそろしながら書きつけたるなり。これはこころのおよばぬにやあらむ、

またよみひとをも、歌のことばをも、書きたがへたるにやあらむ。おほかた聞きて腹立ちなむ人もありてむ。ゆめゆめ。

【主な校異】①人ノナスヲ（冷）―人のもたるを（契・神）②

ヨマセテ（冷）―ひとによませて（契・神）③きゝたまへれ

は（浜）―キタマヘハ（冷）きゝまつれは（契・神）④それ

はさぞ（契・神）―ソレハソレハサゾ（冷）⑤おもはんとて

なり（契・神）―オモハム也（冷）

【現代語訳】「後拾遺といって近ごろ世間でさかんに書き写されている集がある」といつて人が写したものを、仕事のあいまゝいまに読ませて聞きましたところ、とてもすばらしいと感じる歌もあり、いかげなものか感じる歌もあるので、これを書き出して、「それはそのとおりですね」と言う人がいれば、やはりそうだったと思いたいと思つたのだ。このなかに尊敬するすぐれた歌人が詠んだと書かれている歌で、意図が理解できない歌もあるので、それも失礼になるのではないかと不安に思いながら書きつけた。これはわたしの考えが及ばないのだろうか、あるいは作者名や、歌のことばを、書き誤つたのだろうか。おそらくこのことを聞いて腹を立てる人がいるはずだ。必ず必ず

(知られないようにせよ)。

〔語釈〕 ○後拾遺 四番目の勅撰和歌集。撰者は藤原通俊。

○やむことなき歌よみ 人々が尊敬するすぐれた歌人。和歌の名手。(一)では大中臣能宣を「上手」と記す。○「それは

さぞ」とげにとも思はむとてなり 後拾遺集のいくつかの歌にいただいた疑問に賛同する人を求めている。(一〇)には、

藤原長能の歌を取り上げて、「このうたがひどもあるを言ひ聞きかせん人もがなと思ふたまふるなり」とある。○「ころ

えがたきもあれば 表現の意図が理解できない歌もあるので。(三七)では「四条大納言は、歌よみのなかにも「ころえぬ歌

など詠むべき人にもあらぬを、いかにあらむとおぼゆることのあるは、わがひがごと」にこそあらめと思うたまへながら、書

きつけてこそは、かやうのこと知りたらむ人にも問はめとてなり」と、自分が誤解しているのかもしれないが、だれかが説明

してくれると期待して書き記すと述べている。○おそろしな

がら 失礼になるのではないかと不安に思いながら。(一)参照。○聞きて腹立ちなむ人 本書の末文にも「これをえらび

たる人聞かば、いかに腹立ちのらむ。(〓もし撰者が聞いたら、

どれほど腹を立て大声で非難するだろうか)」と記しており、後拾遺集撰者の藤原通俊のことが念頭にありと考えられる。

〔補説〕後拾遺集と『難後拾遺』の成立

後拾遺集仮名序¹⁾、後拾遺集目錄序によると、後拾遺集の撰集は次のように進められた。

承保年間(二〇四〇) 白河天皇から撰集の命が下される。

応徳元年(二〇四)六月二十日 撰集開始(二)下命の九年後)

応徳三年(二〇六)九月十六日 撰集終了・奏覽

寛治元年(二〇七)秋ごろ 再奏

通俊は、白河天皇が自分に撰集の命を下したと記すが、『袋草紙』²⁾『八雲御抄』³⁾は、勅命が下る前から通俊が私的に撰集していたとする。真偽を確かめることはできないが、そのような噂が流れるのには理由がある。多くの人が、勅撰集の撰者としてふさわしいのは、源経信であって、通俊ではないと考えていたからである。

通俊も、勅撰集の撰進にあたって、経信の存在を無視することはできなかつたのであろう。『袋草紙』⁴⁾によると、後拾遺集の奏覽の前に、経信に草稿を見せて批評を求めている。ところが経信はそのときは「神妙」(「非常に立派である」と言いながら、後日、後拾遺集を批難する本書を著したという。後拾遺集は、一度奏覽した後、寛治元年に再奏されているが、通俊はその際に本書で指摘された点を一部修正したようである。

『袋草紙』⁽⁵⁾に興味深い記事がある。経信の孫であり、源俊頼の息子である俊恵が、妹の遺品の中から俊頼自筆の『難後拾遺』の草稿を見つけたという。俊恵はもしや『難後拾遺』の本當の著者は俊頼ではないかと考えたが、『袋草紙』の作者、藤原清輔は、経信が口述する内容を俊頼が書き留めたと解釈する。妥当な見解であろう。それに従えば、本書の原型は経信が息子の俊頼に語ってきかせた内容ということになる。また、俊恵が勘違いしたのは、俊頼が常日頃口にしていた内容と『難後拾遺』の内容とがかなり似通っていたからではないかと推測される。以下の注釈のなかで確かめていきたい。

注

(1) 後拾遺集仮名序「一つひにおほむあそびのあまりに、しきしまのやまとうたあつめさせたまふことあり。拾遺集にいらざるなかがころのをかしきことのは、もしほぐさかさあつむべきよしをなむありける。おほせをうけたまはるわれら、あしたにみことのりをうけたまはり、ゆふべにのべのたぶことまことにしげし。このおほせころにかかりておもひながら、としをおくることここのかへりのはるあきになりにけり、いぬる応徳のはじめのとしのなつ、みな月のはつかあまりのころほひ、やくらのつかさにそなはりていつか

のいとまもさまたげなし、そのかみのおほせをおいそのもりにおもうたまへて、……、みとせになりぬれば、おなじきみつのとしのくれあきのいざよひのころほひえらびをはりぬることになんありけるといへり」

(2) 『袋草紙』撰集故実「于時経信匡房者。此道之英才、先達也。不奉之、如何。但或人云、私撰之後、取御気色云々、頭注「故將作語云、件撰集事無受也。唯如此物ヲ仕タル号仰ト云シカバ、心ト仰畢云々。捍世間歟」

(3) 『八雲御抄』用意部「白河院、後拾遺撰ぜられしをり、経信卿をおきながら、通俊これを承る。これ末代の不審なり。しかれども、この事ゆるある事也。彼集は天氣よりおこらず、通俊これを申おこなへり」

(4) 『袋草紙』撰集故実「于時有難後拾遺云物。世以称経信卿之所為。通俊見之云々。先以件集内々令見合彼卿之处、神妙之由侍。而後日有此難、更不誤云々」

(5) 『袋草紙』雑談「而近年俊頼朝臣息子僧俊恵相語云、吾妹女房逝去之後、彼遺物ヲ開見之处、故頭遺草少々、其中有件難後拾遺之草案。故頭之手跡也。若彼所為歟云々。予按之若以帥口状執筆之間草歟」

〔一〕

後拾遺集第一春上

天曆三年太政大臣七十賀しはべりけるに

能宣

1 たづのすむさはべの蘆アシの下根シタネとけみぎはもえいづ
る春ハルは来キにけり
(春上・九)

これ上手の歌と書きつけられたれば、いとおそろし。

あふいで信云ずべけれども、「さはべ」といふ言事と「みぎは」といふ言事とは同じ言事なるがうへに、「みぎはにもえいづる」とこそいふべけれ、「みぎはもえいづる」とあれば、「に」文字云いるべくこそおぼゆれ。げにくはしからねど、ただそのわたりのことなれば、かやうによみたる歌ウタもあらむ。ふるき歌ウタに、

もかりふねいまぞなきさに来キやすなるみぎはのたづ
のコ多ハさわぐまで

といへるも同じことぞかし。それもよき歌ウタの難ナにこそはすなれ。歌もかればかりなければ、いかながあるべからむ。

〔主な校異〕①上(冷)―ナシ(契・神)―後拾遺 ⑦云事ト

(冷・神)―いふことはと(契) ⑧云事トハ(冷)―いふこと

は、(契)いふことは(神) ⑭コエサハクマテ(冷)―こゑ

さわぐなる(契)こゑきはく也(神)

〔現代語訳〕

天曆三年、太政大臣の七十賀をいたしましたときに

能宣

鶴がすむ沢辺に生える蘆の下根がとけて、汀芽吹く春が来たの
の
だ
な
あ。

これは名手の歌と書かれているので、失礼になるのではないかととても不安だ。尊敬して、疑うべきではないのだけれど、「沢辺」という言葉と「汀」という言葉とは、同じものを表している言葉である上に、「みぎはにもえいづる」と詠むべきなのに、「みぎはもえいづる」とあるので、「に」文字が必要だと思われる。いかにも細部まで知っているわけではないけれど、ただそのあたりのことだと、このように詠んでいる歌もあるだろう。古い歌に、

もかり舟がちょうど今渚にこぎ寄せているようだ。汀の鶴
が鳴き騒ぐほど

と詠んでいるのも、「渚」と「汀」は同じものを表している言葉なのだ。それは良い歌だから許される欠点とするのだろう。「たづのすむ」の歌は「もかりぶね」の歌ほど良くもないので、いかがなものだろう。

〔引用歌〕「もかりぶねいまぞなぎさにきよすなるみぎはのたづの声さわぐなり」（拾遺抄雑下・五〇九・詠人不知、拾遺集雑上・四六五、古今六帖三「も」一八四七、金玉集雑・五〇、『新撰髓脳』『俊頼髓脳』『奥義抄』）※第五句「こゑさわぐまて」は冷泉家本難後拾遺の独自異文。

〔後拾遺集〕○詞書・作者 「天曆三年太政大臣の七十賀しはべりける屏風によめる 大中臣能宣朝臣」 天曆三年（九九九）に催された太政大臣藤原忠平の七十賀のときの屏風歌。蘆が生えた湿地にいる鶴を描いた絵を見て詠んだか。鶴は長寿の象徴である。○能宣 大中臣能宣。拾遺抄・拾遺集初出。二番目の勅撰集である後撰集の撰者のひとりで、清原元輔、源順、紀時文、坂上望城とともに「梨壺の五人」と呼ばれる。後拾遺集は古今集と後撰集に入集した歌人の歌は採らないという方針で撰歌しているが、後撰集に撰者の歌が入集していないので、後拾遺集には「梨壺の五人」の歌が採られている。

〔語釈〕○上手 歌道にたくみで、すぐれている人。名手。

○いとおそろし 批判することが、先達に対して失礼にあたるのではないかと臆する気持ち。新日本古典文学大系後拾遺集は「なお、難後拾遺では、『沢べ』『汀』の同心病を指摘し、『上手の歌』とするには『いとおそろし』と酷評する」と記すが、「おそろし」という語句は、歌そのもののできばえよりも、経信自身も尊敬する歌人の歌を取りあげて批難することに對する心の内の怖れと理解したい。経信の批判の矛先は、優れた歌人が詠んだ多くの歌の中から、よりよって欠点のある歌を勅撰集に入れるという、撰者通俊の撰歌眼の無さに向けられている。○同じ言こと 言葉は違いが同じものを表している語句が、一首の歌の中に複数有ること。歌病のひとつ、同心病。「もかりぶね」の項参照。○「に」文字いるべくこそおぼゆれ 「に」文字が必要だと思われる。場所を示す格助詞の「に」を補って第四句を「みぎはにもえいづる」とすることで、新芽が萌え出る場所を明示せよというのである。「みぎはもえいづる」は八音、「みぎはにもえいづる」とすると九音の字余り句になるが、それよりも明解な表現を優先している。「一字二字余りたりとも、うちよむに例にたがはねばくせとせず」（藤原公任『新撰髓脳』「補説」）○もかりぶね… 『新撰髓脳』は「やまひ数多ある中にむねと去るべきことは、二所に同じことのある

なり。(略) 詞異なれども心同じきをばなほ去るべし」として「もかりぶね」の歌をあげている。また、『俊頼髓脳』は「もかりぶね」の歌について「これ又なぎさとみぎはとなり。みぎはをなぎさともいへば、もじはかはりたれど、同じ心の病とするなり」と記す。○よき歌の難 良い歌であれば許される欠点。

公任は「もかりぶね」の歌の欠点を指摘する一方で、自らが撰集した拾遺抄、金玉集に入れている。『俊頼髓脳』⁽²⁾は、歌病のある歌が三代集に採られていることを述べて、歌全体が良ければ部分的な欠点は気にならないという。ただし、それほど良くもない歌に歌病があればどうしようもないとも述べている。次項参照。○歌もかればかりなければ「たづのすむ」の歌は、「もかりぶね」の歌ほど良くもないので、「沢辺」と「汀」の同心病、助詞の不足は欠点になる。

〔補説〕助詞の不足

元永二年(一一一九)内大臣家歌合は、判者の藤原顕季の判と、源俊頼の「又判」が伝わっているが、

をみなへしいかにぬへばか藤ばかまひと野もあらずほころ

びぬらん(一三、「草花」七番左負・藤原為忠)

の第四句「ひと野もあらず」について、俊頼は、

又判云、……これも先の歌のをりに申しつるやうに、「人

のにもあらず」と書くべきなり、さて、あまらんもじをば略して詠むべきなり。

と述べている。本項の経信の指摘と同じく、場所を示す助詞の「に」文字を書くべきだという。さらに俊頼は、詠み上げるときにはそれを省略して詠むのがよいと述べている。

注

(1) 後拾遺集仮名序「おほよそ古今後撰ふたつの集に歌入りたるともがらの家の集をば、世もあがり人もかしこくて、なにはえのあしよしさだめむこともはばかりあればこれにのぞきたり。むかし梨壺の五つの人といひて歌にたくみなるものあり。いはゆる大中能宣、清原元輔、源順、紀時文、坂上望城等これなり、さきに歌の心をえて、くれたけのよよにいけみづのいひふるされたる人なり。これらの人の歌をさきとして、今の世のことをこのむともがらにいたるまで、目につき心になかふをばいれたり」

(2) 『俊頼髓脳』「これはたとへば人のかたちのすぐれたる中にひとところおくれたる所みゆれどもくせともみえぬがごとし。これらありとて、いとしもなからん歌の、病さへあらむには、ひきぢからもなくやあらむ」

(3) 元永二年内大臣家歌合「白露のおりだす萩のからにしき

鹿のよるきる衣なりけり」(一二、「草花」六番・右持・藤原基俊)の第二句について、顕季は『いだす』などこそいひ侍れ、『だす』こそをさなく侍れ、俊頼は「又、『おりだす』とかかれたるは、書写のあやまりにや。作者の書きたらば、とがとも申すべし」と批難している。

〔一〕

民部卿泰憲、近江守にて歌合しけるに

2 春^{ハル}たちてふる白雪^{シラユキ}をうぐひすの花^{ハナ}ちりぬとやいそぎ
出づ^イらむ (春上・一八) よみひとしらず

うぐひすは春^{ハル}、花^{ハナ}のをり鳴くものなれども、もし花^{ハナ}によりてなむ谷^{タニ}を出づ^イるなどいふ言^{コト}のあらばこそ、かやうはよまめ。さればもとのこころにはあらずと聞^キこゆれば、いかが。

〔主な校異〕②よみひとしらず(契・神)―人不知(冷) ③ウクヒスノ(冷)―鶯は(契・神) ④はなちりぬとや(契・神)―ハナチリヌトテ(冷) ⑤うぐひすはる(契・神)―ウク

ヒスハ□ル(冷/□は虫損) ⑤ハナニヨリテ(冷・神)―しはすによりて(契) ⑥あらはこそ(契・神)―アラハコソコソハ(冷) ⑦キコユレハ(冷)―きこゆるは(契・神)

〔現代語訳〕

民部卿泰憲が近江守の時に、歌合をしたときに

よみ人しらず

立春に降る白雪を見て、鶯は花が散ってしまおうと思つて、今ごろあわてて谷からでて来ているのだろうか。

鶯は春、花の頃に鳴くものだが、もし花を理由にして谷を出るなどという先例があるのなら、このようにも詠めるだろうが。それでは鶯の歌の伝統的な詠み方とは異なっていると感じられるので、いかがなものか。

〔後拾遺集〕○本文 第三句「うぐひすの」(難冷/冷・陽為・陽乙・太)―「うぐひすは」(難契・神) 第四句「はなちりぬとや」(難契・神/冷・陽為・陽乙・太)―「はなちりぬとて」(難冷)

○詞書・作者 「民部卿泰憲近江守にてはべりけるととき三井寺にて歌合しはべりけるによめる よみ人しらず」藤原泰憲が近江守であったのは寛徳三年(一〇四六)―天喜二年

(二〇五四)。歌合は天喜元年(一〇五三)五月に行われた。

うぐひす 鶯が梅の花が咲く頃に鳴くと詠んだ例、古今集の素性法師の歌「春たてば花とや見らむ白雪のかかれる枝にうぐひすぞ鳴く」(春上・六「雪の木にふりかかれるをよめる」)の第二句の「らむ」は現在推量の助動詞。眼前で鶯が鳴いている理由を推量して、枝にとまって鳴いている鶯は、枝に降りかかっている白雪を梅の花と勘違いしているのではなからうかという。〇いそぎ出づらむ いまごろあわてて出てきているだろう。遠くの谷にいる鶯の現在の様子を推量する。

〔語釈〕〇谷を出づる 鶯は、立春のころ、谷から出てきて春を告げる。「うぐひすの谷よりいづるこゑなくは春くることをたれかしらまし」(古今集春上・一四・大江千里「寛平御時きさいの宮のうたあはせのうた」)また、寛和二年内裏歌合の歌「こほりとくかぜのおとにやすごもれるたにのうぐひすはるをしるらむ」(二・「鶯」左持・斉信)は、谷の鶯は春風が氷を解かず音で春の訪れを知るのだろうか⁽¹⁾と詠んでいる。〇花によりてなむ谷を出づる… 鶯が、梅の花が咲くことをきっかけにして春の訪れを知り、谷を出る。経信はそのような先行表現は無いので、認められないという。〇もとのころ 正統的、伝統的な表現、趣向。〔補説〕

〔補説〕もとのころにはあらず

本項の「春たちて」の歌は、「後拾遺集」「うぐひす」の項に引いた、古今集の素性法師の歌の「鶯が勘違いする」という発想を利用し、さらに、枝に白雪が降りかかるのを見て梅が咲いたと勘違いした鶯は、今ごろあわてて谷から出ようとしているだろうと、新しい解釈を付け加えて詠んでいる。

当時の歌合判詞をみると、このような複層的な古歌利用を認めるかどうかということが、歌人たちの間で議論になっているが、経信はほとんど認めないという立場である。⁽²⁾

注

(1) 春風が氷を解かずという表現は、『礼記』月令「孟春ノ月、東風氷ヲ解ク」が典拠。「袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ」(古今集春上・二・紀貫之「はるたちける日よめる」)

(2) 鳥井千佳子「歌合判詞の『ふるきうた』をめぐって」(『神女大國文』第15号 二〇〇四・三) 参照。

〔三〕

正月二日あふさかの関にてうぐひすを聞きて
3ふるさとへゆく人あらばことづつてむけふうぐひすの

初音ハツネキ聞きつと

(春上・二〇)

あふさかの関セキにてうぐひすの初音ハツネを聞キくがをオかしければよめるか。さらば「あふさか」といふ言ウコトあるべし。さらずはさせることなし。兼盛が「けふ白河シラカハの関セキは越コえぬ」とよめるは、みちのくにへ、いとほるかなるところの白河シラカハの関セキまでゆきて「都ミヤコへつげやらむ」とよまれたればこそ、いとをかしけれ。これはかれをまなびたるが、劣アトりたればみぐるしくなむ。

つげまほしうは供トモの人ヒトひとりしてつげにをこせむに、いとやすきことにはあらずや。

〔主な校異〕①ナシ(冷)―読人しらす(契・神)⑤ヨメルカ(冷・清)―よめるなり(契・神)⑨イトヲカシケレ(冷・神)―おかしけれ(契)⑩ツケマホシウハ(冷)―猶つけまほしうは(契・神)

〔現代語訳〕

正月二日、逢坂の関で鶯の声を聞いて

住み慣れた京へ行く人がいれば伝えてもらおう。今日ここで

鶯の初音を聞いたと

逢坂の関で鶯の初音を聞くことが風流なので詠んだのか。それならば「逢坂」ということが必要だ。そうでなければさしたることはない。兼盛が「けふ白河のせきはこえぬ」と詠んでいるのは、陸奥国へ、とても遠い所にある白河の関まで行って、「都へつげやらむ」とお詠みになったからこそ、とても風流なのだ。この歌はそれをまねているが、劣っているので見苦しい。

告げたいのなら供の一人に命じて伝えに行かせれば、いともたやすいことではないでしょうか。

〔引用歌〕「たよりあらばいかでみやこへつげやらむけふ白河の関は越えぬと」(拾遺抄別・二二六・兼盛「みちの国の白河の関越え侍りける日よみ侍りける」、拾遺集三三九)

〔後拾遺集〕○本文 初句「ふるさとへ」(難/冷・陽為・陽乙)―「旧里に」(太) ○詞書・作者 「正月二日あふさかにてうぐひすのこゑをききてよみはべりける 源兼澄」○兼澄 後拾遺集が作者とする源兼澄は、拾遺集初出。拾遺集に一首、後拾遺集に七首、金葉集三奏本に一首入集。 ○惠慶集

本項の「ふるさとへ」の歌は惠慶集にもある。詞書「正月二日、あふみへまかるに、あふさかこえ侍に、うくひすのなくをきき侍て」(冷泉家時雨亭文庫資經本惠慶集・大成二七)『難

後拾遺」は作者が書かれていないか「よみ人しらず」、後拾遺集は「源兼澄」としており、実作者は特定できない。○逢坂

の関 近江国の逢坂山にある関所。東海道、東山道の都への出入り口。○ふるさと 後拾遺集では、「都」を指す例が多い。作者のほとんどが京の都で生まれ育っているからであろう。

○初音 鶯が新年の最初に鳴く声。

〔語釈〕○あふさかの関にてうぐひすの初音を… 尊経閣文庫本元輔集に「うぐひすのねをさきだててあふさかのせきにかすみぞたちかくれる」（天延元年九月、うちのおほせにてつかうまつれる御屏風のうた）大成Ⅲ八三」と、逢坂の関の鶯を詠んだ例がある。天延元年（九七三）九月、円融天皇の命により詠進された屏風歌なので当時よく知られていたであろう。この元輔の歌のように、「逢坂の関」で鶯の「初音」を聞いて、春の訪れをいち早く察知するという趣向を詠むのなら、「逢坂」ということは、詞書だけではなく、歌の中に詠み込むべきだと経信はいうのである。○白河の関 東山道にあり、白河の関を越えると陸奥国に入る。能因が「みやこをばかすみとともにもたちしかど秋風ぞふくしらかはのせき」（後拾遺集羈旅・五一八「みちのくににまかりくだりけるに、しらかはのせきにてよみはべりける」と詠んでいる。○かれをまなびたるが、

劣りたれば… 本項の「ふるさとへ」の歌は、「引用歌」に引

いた拾遺抄の兼盛の歌「たよりあらばいかでみやこへつげやらむけふ白河の関は越えぬと（＝もしついでがあるなら、なんとかして都の人に便りを届けたいものだ。きょう白河の関を越えたと）」をまねて、逢坂の関から都の人に便りを届けたいと詠んでいる。「白河の関」の項に引いた能因の歌によると、白河の関までは都を出立して約半年かかっている。一方、逢坂の関までは都を出立して半日ほどである。都の人に便りを届けたいという表現は同じでも、白河の関まではるばると旅を続けてようやくたどり着いたという感慨は、本項の後拾遺集歌には無い。経信は詠まれている詞だけではなく、心も含めて、先行歌を利用すべきだという。「補説」○つげまほしうは… 最後の一文は和歌の批評ではなく、経信が軽い冗談を言っている。

〔補説〕かれをまなびたるが、劣りたれば…

『俊頼髓脳』は古歌の利用について、「歌をよむに古き歌よみにせつれば悪しきを、いまの歌よみましつれば悪しからずとぞ承る」と記す。「古き歌」は昔の歌、「いまの歌」は新しく詠んだ歌で、昔の歌を利用して新しく詠んだ歌が、昔の歌よりも優れていればよいと俊頼は聞いていた。裏読みすると、昔の歌よりも新しく詠んだ歌のほうが劣っているのはよくないという

ことになる。

〔四〕

選子内親王いつきと申しける時、人々まゐりて梅が枝などいふ歌をうたひけるに

4 ぶりつらむ雪きえがたき山ざとに春を知らするうぐ
ひすの声 (春上・二二)

もしこの歌は書きたがへたるにやあらむ。など。「つらん」、もし「ふりつもる」か。

〔主な校異〕②ナトイフ哥ヲ(冷)―とまうすうたを(契)と云哥などを(神)⑤つらん(契・神)―ツラク(冷)

〔現代語訳〕

選子内親王をいつきと申しあげていた時、人々が参上して「梅が枝」などいふ歌を歌ったときに

今も降っているにちがいない。雪がなかなか消えない山里に、春を知らせる鶯の声がするよ

この歌は、もしや書き間違えたのだろうか。どうしたのか。

「つらん」はもしや「ふりつもる」か。

〔引用歌〕催馬楽・梅枝「梅が枝に 来ゐる鶯や 春かけてはれ／春かけて 鳴けどもいまだや 雪は降りつつ／あはれそこよしや 雪は降りつつ」

〔後拾遺集〕〇本文 初句「ふりつらん」(難／陽為・太イ)―「ふりつもる」(冷・陽乙・太)※太山寺本は「ふりつもる」に「ラン」と傍記する。〇詞書・作者 「選子内親王いつきときこえけるとき、正月三日上達部あまたまゐりて『梅枝』といふうたをうたひてあそびはべりけるに、うちよりかはらけいだとてよみはべりける よみ人しらず」〇選子内親王 村上天皇の皇女、母は藤原安子。賀茂神社の齋院を円融・花山・一条・三条・後一条朝の五代にわたつてつとめ、大齋院と称された。拾遺集初出。後拾遺集には七首入集。この「ふりつらん(ふりつもる)」の歌の作者は「よみ人しらず」とあるので、齋院に仕える女房の一人が詠んだか。〇いつき 「齋の皇女」の略。選子内親王が齋院をつとめたのは、天延三年(九七五)から長元四年(一〇三二)。

〔語釈〕〇ふりつらむ 今も降っているにちがいない。「つ」は強意の助動詞、「らむ」は現在推量の助動詞。離れた場所において現在の山里の様子を推測する。〔引用歌〕にあげたように、

催馬楽の「梅が枝」は「雪は降りつつ」と繰り返して歌うので、最初にこの歌を詠んだ時には、催馬楽の歌詞を受けて「ふりつらむ」と詠んだか。○ふりつもる 経信は、「降りつもった雪がなかなか消えない山里に」と平明に詠むべきだという。後拾遺集諸本が初句を、「ふりつもる」とするのは、難後拾遺の指摘に従って撰者が本文を改めたと考えられている。

〔五〕

正月七日、子日にあたりて雪の降りにはべりけるに

伊勢大輔

5人はみな子の日の松をひきにゆくけさの若菜はゆき
やつむらむ (春上・三二)

この歌は、「若菜は雪やつむらむ」といへるもをかしきやうなれど、「ひきにゆく」とあるこそすべらかにもおぼえね。おほよそをさなげなり。

〔主な校異〕 ①子日に(契・神)―子日(冷) ①アタリテ(冷)―あたりけるに(契) あたりてけるに(神) ③ケサノ(冷)―けふの(契・神) ⑤おかしきやう(契・神)―オカシヤウ

(冷)

〔現代語訳〕

正月七日、子日にあたって雪が降りましたときに

伊勢大輔

人は皆、子の日の松を引きにゆく。今朝の若菜は人が摘むのではなく、若菜に雪が積むのだろうか。

この歌は「若菜は人が摘むのではなく、若菜に雪が積む(＝積もっている)のだろうか」と詠んでいるのはおもしろい詠み様だが、「引きにゆく」とあるのはなめらかに聞こえるとは思えない。総じて幼稚な感じである。

〔後拾遺集〕 ○本文 第二句「ねのひのまつを」(難／陽乙)―「のべのこまつを」(冷・陽為・太) 第四句「けさのわかなは」(難冷／冷・陽為・太)―「けふのわかなは」(難契・神／陽乙) ○詞書・作者 「正月七日子日にあたりてゆきふりはべりければよめる 伊勢大輔」 ○伊勢大輔 後拾遺集初出。一条天皇の中宮彰子に仕えた。「大中臣重代」の一人。『袋草紙』撰集故実は、大江匡房の言として「頼基、能宣、輔親、伊勢大輔、伯母(筑前)、安芸君、六代相伝歌人」と記す。 ○子の日 十二支の子にあたる日。特に、正月の最初の子の日は、長寿を

祈るため野に出て小松を引く。 ○ひきにゆく この語句は後

撰集に先例がある。「君のみや野辺に小松を引きにゆく我もか
たみにつまんわかなを」(春上・七・よみ人しらず「子日にを
とこのもとより、けふはこ松ひきになんまかりいづるといへり
ければ) ○若菜 平安時代の宮中や貴族の家では、正月の子

の日や正月七日に若菜を摘み、若返りを祈つて食べた。「七日、
雪間の若菜摘み、青やかにて…」『枕草子』正月一日) ○ゆ
きやつむらん 「つむ」は雪が「積む」(＝積もる)と若菜を

「摘む」の掛詞。「かすがのは雪のみつむとみしかどもおひいづ
るものは若菜なりけり」(後拾遺集春上・三五・和泉式部)

【語釈】○をかしきやうなれど おもしろいようだが。「積む」
と「摘む」との掛詞表現については評価している。 ○すべら
かにもおぼえね 歌を詠み上げた時になめらかに聞こえない。

「ひきにゆく」は (hi.ki.ni.yuku) とi音が続くため、このよう
に感じるのだろう。俊頼は、判者をつとめた左近権中将俊忠朝
臣家歌合で「山ざとをすぎがてになくほととぎすみやこのひと

はまちやかぬらん」(三二番「郭公」左勝・一宮尾張君) につ
いて、「すゑの『まちやかぬらん』などぞ、すべらかにもきこ
えぬやうなれど、ふかきとがにはあらぬにや」と述べる。 ○
をさなげ 歌ことばのようではない。俊頼は、藤原忠通邸で

催された撰政左大臣家歌合で、「なく雁のなみだやそらにこぼ
るらん露けきたびのくさまくらかな」(六、「旅宿雁」三番右

勝・忠通) について、「…次の歌、はじめのいつつの文字ぞあ
りのままにてをさなびたるやうなれど、すゑ優なり」と、初句

「なく雁の」を「ありのままにてをさなびたる」と評している。
「ありのままにて」は、工夫のない安直な表現という意味に解
釈できる。

【補説】すべらか・をさなげ
「すべらか」、「をさなげ」「をさなし」という評語は、俊頼の
歌合判詞に特徴的である。経信の判詞が伝わっている高陽院七
番歌合にはこれらの評語は見あたらない。

【六八】

正月七日卯日にあたりてはべりけるに、「けふは
卯杖つきてや」といひにおこせてはべりければ

通宗朝臣

6 卯杖つきつままほしきはたまさかにきみがとふひの
わかかななりけり (春上・三三二)

「とふひの」「わかかな」などあるは、あしうもあらず。

「卯杖つきつままほしきは」とよめるは、卯杖ウツヱの日ヒ、よめる言コトなれど、おほよそかなひたることこそきはよまめ。「卯杖ウツヱつきゆかまほしき」とあらばこそさてやあらめ。わかなつまむは、かならず卯杖ウツヱをやはつくべきとおぼゆるはいかが。

〔主な校異〕②イヒニヲコセテハヘリケレハ 通宗朝臣（冷・神）―通宗朝臣いひにおこせてはへりければ詠る（契）⑥アシウモアラス（冷）―あしくもあらねとも ⑦ヨメルハウツエノヒヨメル事ナレト（冷・神）―よみたれと（契）⑨ウツエツキ（冷）―うつつゑつきて（契・神）⑩サテヤアラメ（冷）―あらめ（契）さてもあらめ（神）⑩ツمامハ（冷）―つむには（契）つむは（神）⑩ウツエヤハ（冷・神）―つつゑをやは（契）

〔現代語訳〕

正月七日卯の日にあたっておりましたので、「今日は卯杖をついたか」と言つて寄こしましたので

通宗朝臣

卯杖について摘みたいものは、ごくまれにあなたが訪う日の、飛火野の若菜だったのだな

「とふひの」「わかな」などと詠んでいるのは、悪くはない。「卯杖について摘みたい」と詠んでいるのは、卯杖の日ヒに詠むことばではあるが、うまくあてはまれば、そう詠んでもよいだろうが。「卯杖について行きたい」と詠むなら、それはそれでよい。若菜を摘むような時は、必ず杖をつかなくてはならないのだろうか、そんなことはないと思うのだが、どうだろう。

〔後拾遺集〕○詞書・作者 「正月七日卯日にあたりてはべりけるに、けふはうづゑつきてやなど通宗朝臣のもとよりいひにおこせてはべりければよめる」 通宗は作者に和歌を詠んでよこした相手であり、作者は伊勢大輔である。〔補説〕○通宗 後拾遺集初出。伊勢大輔の孫で、後拾遺集撰者の通俊の兄。○けふは卯杖つきてや この時、通宗が伊勢大輔に贈った歌「あらたまのしもわかなもつむ人はうづゑつきてやのべにいづらん」（彰考館本伊勢大輔集「同日（正月七日）、むまごのもとから」・大成I一七）。○卯の日 十二支の卯にあたる日。特に、正月の最初の卯の日ヒに卯杖を献上する。○卯杖 木を五尺三寸（約一、六メートル）に切りそろえた杖で、悪鬼を払うために地面をたたく。○とふひの 現在の奈良市にある。春日山のふもと、春日野の一部。「飛火野」と「訪ふ日」は掛詞。

〔語釈〕〇あしうもあらず 飛火野の若菜は「かすがののどぶ

ひのもりいいでて見よ今いくかありてわかかなつみてむ」(古今集春上・一八・よみ人しらず)の歌でよく知られている。〇

卯杖の日 正月最初の卯の日は卯杖をつくので、このようにいう。〇おほよそかなひたることこそさはよまめ 卯杖をつき

ながら若菜を摘むのは必然性がないと、経信は批難する。

〔補説〕『難後拾遺』が記す後拾遺集の詞書

『難後拾遺』は、後拾遺集の詞書をすべて書き記すのではなく、文末などを省略することが多い。推測の域を出ないが『難後拾遺』の成り立ちは、序にいうように後拾遺集を人に読ませる聞きながら、経信が口述した内容を、はじめは後拾遺集の本文の行間などに記しておき、次にそれを後拾遺集の詞書・作者名・和歌とともに抜き書きして、現存する本文の形に整えたと考えるのが自然であろう。

本項で、後拾遺集の詞書の中にある「通宗朝臣」の名前が作者名になっているのは、成立の早い段階で生じた誤りだと考えられる。

〔七〕

正月七日、周防内侍の許につかはしける

藤三位

7 かずしらずかさなるとしをうぐひすの声コエするかたの
若菜ワカナともがな (春上・三七)

貫之が歌に、

つみたむることのかたきはうぐひすの声コエするかたの
若菜ワカナなりけり

とよめる。若菜ワカナつみに野ノにいでたるに、うぐひすの声コエするかたをきくほど、若菜ワカナをなむつみためぬとあるこそいふにはあれ。ここにはかれをとりて、「声コエするかた」とよみたるが、さるべしとおおぼえぬなり。かの歌を本歌もとのかたにてよみたるは、かかる証歌あらむや。

〔主な校異〕⑧ヨメル(冷)―よめるは(契・神) ⑨キクホド

(冷)―きくほどに(契・神) ⑩ワカナヲナム(冷)―わかかな、
ん(契) わかなを(神) ⑪かのうたを(契・神)―カノ(冷)

⑫証歌(冷・神)―うた(契)

〔現代語訳〕

正月七日、周防内侍の許にとどけた歌

藤三位

数えきれないほど多く積み重なる年齢を、うぐひすの音がする方角の若菜のようにしたいものです。

貫之の歌に、

摘み集めることが難しいのは、鶯の音がする方角にある若菜だったのだなあ

と詠んでいる。若菜を摘みに野に出ているときに、鶯の音がする方角に耳をかたむけて鳴き声を聞いている間は（つい摘んでいる手を止めてしまつて）、若菜を摘み集めることができないうのである。この「かずしらず」の歌は、それを取つて、「声するかた」と詠んでいるけれども、ふさわしい詠み方とは思えないのだ。あの「つみたむる」の歌を本の歌にして詠んでいる歌に、このような証歌はあるだろうか。

〔引用歌〕「つみたむることのかたきはうぐひすの音するのべのわかななりけり」（拾遺抄春・一九・読人不知、拾遺集二六）

〔後拾遺集〕○詞書・作者 「正月七日周防内侍のもとへつかはしける 藤三位」○正月七日 宮中や貴族の家では、若菜を

摘みに行つたり、贈り合つたりした。「五」参照。○藤三位

藤原親子。後拾遺集のみ入集。白河院の乳母として重んじられた。治安元年（二〇二二）に生まれる。○周防内侍 平仲子。後拾遺集初出。周防守平棟仲女。後冷泉朝頃出仕、白河・堀河朝まで仕えた。長元の末の一〇三六年ごろ生まれたとされてお、藤三位とは十五歳ぐらいの年齢差がある。

〔語釈〕○若菜つみに：いうにはあれ 鶯の音がする方角に耳をかたむけて声を聞いている間は、若菜を摘み集めることができないうと、貫之の「つみたむる」の歌を経信が解説している。

○さるべしともおぼえぬなり 適當とは思えないのだ。〔補説〕一 ○本歌 もとのうた。典拠とした歌。〔補説〕二 ○証歌 証拠となる歌。

〔補説〕

一 「若菜は、年齢を重ねても若々しいままで老けない」と詠んだ、拾遺抄の歌、

春日野に多くの年は積みつれど老いせぬ物は若菜なりけり（雑上・三七六・円融院御製「わかなを御覧じて」、拾遺集

春・二〇）

は当時の人々によく知られていた。本項の「かずしらず」の歌も、それにならつて、「年齢を重ねても若菜のように若々しく

ありたい」と詠んでいるが、「うぐひすのこゑするかたの若菜」という、貫之の歌を典拠とする語句を（鶯の声が聞こえる野で摘み集めた若菜」という程度の意味でしか用いていないと考えられる。貫之の歌に詠まれている「うぐひすのこゑするかたの若菜」は、摘み集めた量がわずかしかない若菜である。その解釈を使つて藤三位の歌を現代語すると、「数えきれないほど多く積み重なる年齢を、わずかな量の若菜のようにしたい」となる。若々しくありたいと詠もうとするなら、若さの象徴である若菜の量は多いほうが良いのではないか。貫之の歌の解釈にこだわると、不自然である。

周防内侍集には、周防内侍の返歌も入っている。

七日、二位の御つばねより

かずしらずかさなるとしをうぐひすのこゑきくかたのわか
なともがな

返し

としつめどみちよのかずをかぞふべききみはなほこそわか
ななりけれ

(二・三番)

藤三位が「歳を重ねるのはいやね、若々しくありたいわ」と詠みおくり、年下の周防内侍が「まだまだお若いですよ」と返しの歌を詠んだという、私的な和歌の贈答である。

経信は、藤三位の歌を「うぐひすのこゑするかたの若菜」という語句を、もとにした歌における意味を考えずに使っていると批難するが、もし後拾遺集に入集していなかったら、特に問題にしないだろう。勅撰集の歌はどうあるべきかという観点で『難後拾遺』は述べられている。

二 本歌・もとのうた

前関白師実が寛治八年（一〇九四）に催した高陽院七番歌合で、経信は判者をつとめているが、大江匡房が詠んだ「郭公」題の歌について次のように述べている。

ほととぎすくもみはるかになのればやあさくらやまのよそに
きくらん

(二八、「郭公」二番右負)

右歌は、心ふかき歌とこそみたまふれ。上の句も、下の句も、もとのうたどもはべらんかし。もし、

あさくらやきのまろどのにわがをればなのりをしつ

といふことをよめるにやはべらん、下の句は、

むかしみし人をぞいまはよそにきくあさくらやまのくも
みはるかに

といふ歌にやはべらん。さらば、「あさくら山になのりをしたらんをとほくなりてきく」とあらんは、かなひなんやは。このことのおぼつかなければ、左のかちとやまうすべから

ん。

判詞に引く「あさくらやきのまろどのに」の歌について、『俊頼髓脳』は大齋院（選子内親王）が語った話として、次のような故事を記す。天智天皇は、即位前のある時期、筑前国の朝倉に住んでいた。事情があつて隠れ住んでいたので、訪問する人には、自分から名のとつて出入りするようにと申しつけていたという。つまり、「あさくらで名のる」ということが、この歌では重要なのである。

経信は判詞で、匡房の歌は、郭公を、雲の上ではなく、「あさくら山で名のらせ」、それを遠くから聞くと詠むべきだったという。経信がもとのうたの何を大切にしていたのかがわかる例である。

注

(1) 「あさくらやきのまろどのに我をれば名のりをしつつ行くは誰が子ぞ」(新古今集雑中・一六八九・天智天皇御歌『俊頼髓脳』『綺語抄』『和歌童蒙抄』『奥義抄』)

(2) 『俊頼髓脳』(「歌略」このうたはむかし天智天皇、太子にておはしましける時、筑前国にあさくらといへる所にしるびてすみ給ひけり。…世をつつみ給へる事ありてみやこにはおはせて、さるはなれたる所におはしけるなり。さてつ

つみ給へるがゆゑに入りくるひとにかならず問はぬさきに名のりをして出で入れと起請をおほせられたりければ、かならず出で入れるひとの名のりをしけるとぞ申しつたへたる(略)

(参考文献)

- 後拾遺集 冷泉家時雨亭叢書『後拾遺和歌集』(朝日新聞社) 対校に用いた四本は「凡例」に記した。
- 俊頼髓脳 冷泉家時雨亭叢書『俊頼髓脳』(朝日新聞社)
- 袋草紙 新日本古典文学大系(岩波書店)
- 八雲御抄 『八雲御抄伝伏見院筆本』(和泉書院)
- 枕草子 新編日本古典文学全集(小学館)
- 右記以外の勅撰集、私家集、歌合は「日本文学WEB図書館」(古典ライブラリー) 所収の新編国歌大観、私家集大成によつた。また、歌学書は日本歌学大系によつた。

(とりい) ちかこ 就実短期大学非常勤講師)